



ナナカマド

戦争シリーズ③

高木徳一

雲海に虹が立ち、時は一九九〇年(平成二年)

五月五日。

上海空港を離陸した機が急角度で上昇し、水平飛

行に移った後、孫京華は足元に置いた薄赤の布

ソニンホア

製ポストンバックから書類を取り出し、小テーブルに乗せ眼を落とす。

六十分が経過し、ぶつぶつ言いながら読み終えた。

「随分熱心ですね。日本語で勉強ですか？」

流暢ではあるが、中国人とは何処となくアクセントの違いがあるソフトな音声が窓際に居る京華のやや厚目で大きな耳に入ってきた。

「ええ。明日会議で発表するので、そのリハーサルをしているんです」「そうですか。じゃあ、お邪魔ですね」「そんな事ありませんわ。もう済みました。それに、北京のホテルに着いてから寝るまで十分練習時間が有りますから」「中国の方と直にお話して、少しでも会話力を付けたいんです」

「貴方の中国語、お上手ですね、お世辞でなく」

「まだまだ、十分ではありませんよ」「・・・」

「あ、そうそう。未だ自己紹介も済んでいません

ティエンチヨーンチエンチー

ね。失礼致しました。僕は 田 中 健 治と言

います。日系の東京ビール会社の営業マンです。

現在二十五歳で、一年前に北京の営業所に赴任してきました。これが僕の名刺です」

健治は紺の背広の内ポケットから名刺入れを取り

出し、一枚を京華のふくよかな胸の前に差し出し

た。京華は受け取りながら活字を眼で追う。

ふさふさした髪を七二に分け、顔の割りに大きな黒目が輝いている健治である。

「はい、私の名刺です。孫京華と申します。私は日系の日中製薬会社で働いています」「ここに製品学術部と書いてありますが、どんな事をするんですか?」「字の通り、製品について学術的な研修をするんです」「薬についての門外漢には分から

ないです。具体的に教えて下さい」「貴方と同じような営業の人達が、病院や薬局に行つて、薬の効果、副作用、特徴について競合品と比べて、何処がどう良いのかを医師や薬剤師に伝えます。その際、役立つように営業の人に資料を配布して研修するのです。これがその資料ですの」「そう言えば、内でもビールの新製品研修があります。味、口当たりはどうか、価格は他社より安いかとか。：。値段については言わないのですか?」「学術的な面からのアプローチだけです。価格の方は、原価積み上げ方式と言つて原価、包装費、運送費、人件費、経費、利益などを会社が決めて政府に申請します。ほぼ、申請した価格になります。他社との値段比較は営業部が作成しますの」「どんな薬を売つていらつしやるのですか?」「胃潰瘍・十二指腸潰瘍の薬、高血圧の薬、喘息治療薬、抗生物質などです」「従業員は何人位おられるんですか、日本と中国と分けて?」「何だか、刑事みたくなくな

てきたな」「構いませんわ、別に秘密ではありませんから。日本には三千人で、中国では三百人です」頬骨の上につきり肉の付いた京華は答えた。「内よりかなり大きいな。こちらはその半分より少ないです」

突然、機体がグラグラと横揺れした。そこかしこで、女性の叫び声が起こった。横向きで話す京華の肘掛の左手が健治の膝に落ち、次の瞬間、股間へと滑り込んだ。スウーッと一気に落下する。

アアーと、同時に声にならない声を発した。このまま、地獄に落ちるのかしら……。京華の脳味噌が上半分に浮いた。相当長い時間とも思えず、短時間とも思える。

「こちら機長、機長です。只今は突如下降気流に遭遇し、五十米程落ちましたが、もう大丈夫ですので、ご安心下さい。お席におられる間は、例えばベルト着用のサインが消えましてもしつかりとベルトをお締め下さい」

京華は自分の格好に気付き、慌てて彼の股間から手を引き抜いた。健治は彼女の頬が赤らむのを見逃さない。

「何が、ご安心よ。また何時同じ目に遭うかも知れないのに」

京華は受け唇を尖らし、機長に八つ当たりした。

「仕方無いさ、自然現象だから。運悪く、下降気流の所に飛び込んでしまったんだ」「よくも平気で解説出来るわね」「平気じゃないさ。恐怖心が未だ尾を引いているよ。予告が無かったように、現在の気象観測体制では局所的なエアポケットの存在を察知するのは難しいと思うよ」「本当に墜落する場合も有るんですよ?」「そりゃあ、有るだろうよ。機長はどの位の割合で最悪事態になるか知ってる。それを乗客に知らせると、パニックになるので言わないだけさ。機長の腕が良かったと思わなきゃあ」「本当に、怖かった。こんな経験一度としたくないわ」「そりゃあ、そうだよ、誰だって」

会話を遣り取りしている内に、健治は彼女が初対面の人と思えなくなってきた。恐怖体験を共有したからか、しかも隣の席で、あんな姿勢で・・・後方が何かざわついている。紺の制服が床に横たわっているのが、人々の脚の間から見えた。スチユワードスが天井に頭をガツンとぶつけたそうだ。「お客様第一で、自分を犠牲にしているのね。大変な職業だわ。傍目には華やかな憧れの就職先と思われているのに・・」「何事も中に入ってみなければ、分からないって事だよ」

中国航空機の窗外は、青空が彼方まで見え、眼下には幾筋かの白雲がゆつたりと流れてゆく。

「さ、今度はしつかりとベルトを締め直さなければ。緩めだったので貴方に迷惑を掛けて・・」
甘さをブレンドした上擦った音声だった。

「迷惑だなんて。旅は道連れ、世は情けさ。地球上に居る人類五十億人、見た事もない数だけどその中の二人が今この時間に隣に存在する。殆ん

ど奇跡に近いよ、これは・・・」面白いわね、そう考えると。そんな風にも今迄考えた事もなかったわ

「だから、この瞬間をお互い大切にしなければ」

「そうね」「次は家族の話をしようか・・・。当然言いたくない事は言わなくていいんだ」

こう先手を打つ事で、相手の心が開き易くなると、健治は考えた。

「実家は農家で祖母と両親、それに兄が居ます」

「内は祖父が元気で、両親が駅前でホテルを経営しているんだ。姉が居て去年嫁ぎました」「ま、ホテルだなんて、大変な商売ね」「僕は手伝った事がないから分からないよ。祖父母が旅館を引き継いで、両親がホテルにしたんだ」「そうなの。私の趣味は水泳かな。子供の頃、腕白坊主共と一緒に南京市を流れる長江で泳いだの。今思えば、あんな泥水みたいな所で良くぞ水浴びしたって感じ。当時はこれが川と言うものかと思ってた。実家の裏の小川はもう少しましだったけど」

京華は出るところも出ていて、後ろの赤い中国服がパンパンであった。

「僕は一九六五年六月五日生まれで・・・」「まあ、偶然ね、私と誕生日が同じだなんて・・・」「へえー、そうなの。幾つ下かな?」「一つ上のお姉さんよ」
両笑窪を見せながら、白い歯がこぼれた。

「これも何かの因縁かな・・・」「中国語は何処で覚えたのかしら?」「商科大学の中国語クラブで、君のような中国人の美人女性から」
「道理で中国語がべらべらなのね」「喋るのは何とかこなせるが、ヒアリングはまだまだだよ。中国では、信教の自由が憲法で保障されているけど、最近は宗教に対する規制も若干強まっていると聞いている。仏教、道教、イスラム教の信者が多く、キリスト教、カトリック教は少数派ですね」「良くぞ存知ね。私は地元の高校を出て、上海の医学院で内科学を学んできたの。家は仏教よ。でも、悪いけれど余り宗教に興味は無いの」「内も仏教徒だ。日本では神道

と仏教が大半で、キリスト教信者は極端に少ない」

「そうなの」「君は食わず嫌いだと思ふな。宗教を学べば、人間の生き方、在り方が見えてくる。そして、個の集まりである民族、国家の在るべき姿にも言及している。何だか、かなり横道にそれた感じだ。何の話だっけ・・・」「趣味のお話よ」

「あ、そうか。君は泳ぎが得意なんだ。僕も福島市内を流れる阿武隈川でたらいを浮かべて、その周りで泳いだ事がある。小学生では、放課後ランドセルを原っぱに置いてソフトボールを暗くなるまでやったもんだ。中学のクラブ活動はバスケットボール部だった。高校では剣道を一年足らず。初段を取ろうとした時、急性盲腸炎で入院して止めちまった。バスケットにも籍を置いたが、ちびだがジャンプ力とシュート力の凄いのが居て、レギュラーになれないと考へ、退部した。東京の大学時代は軟式野球部に入り、三、四番で、センターを守った。脚が速かったからな。捕手が卒業し

たら、短足だから股間から球が逃げないし、地肩が強いからと無理やり捕手にさせられたもんだ」

「あら、まあ。高校の時私もバスケット部で汗を流したわ」「それで、がっちりした体格してるんだ。背も高そうだし・・・」「百六十五センチで、両親と同じ位よ」「僕より二センチ高いな」

アナウンスが頭上に響いた。

「後二十分で北京首都空港に到着致します。飛行機は下降し、着陸態勢に入りますので、テーブルと椅子を元の位置に戻して下さい。また、ベルトもしっかりと締め直しをお願いします」

何時の間にか、両者の会話は一時間半が過ぎ去っていたが、京華には三、四十分位にしか感じられない。健治との話題が愉しかったからか。

確かに、不思議な事に共通点が多いと思へた。

「ご免よ」「何故、謝るの?」「だって、君の勉強の邪魔をしちゃって・・・」「そんな事無いわよ。日本のもっと知りたい位なの。祖母は中日戦争前

に日系の自動車会社で工場長の秘書兼通訳をしていたの。チャンスがあれば日本に行きたかったと。叶わぬ夢になってしまったけれど。そんな話を高校生の時、チラツと聞いて日本に興味を持ったと言う訳。それで、日系会社に就職し、日本の事を祖母に教えて上げたかったの」「そうだったの」「会社の日本人は仕事に追われて、じつくりと日本の文化や習慣を教えてくれないのよ」「僕で良かったら、付き合うよ・・・」

口に出してしまつてから、しまったと健治は思った。落ち着き払つた物腰から、人妻なのかも知れない。ひよつとして子供も一人位居て・・・そんな女とは関わりたくないな。第一、自分が面白い。やはり、交際するなら独身がいい。意を決して口にした。

「僕は独身だけど、貴女は?」「あら、なーに、急に。結婚したら付き合いたくないって事・・・」

「そう言う訳でもないけど・・・」「困つたと言う文

字が顔に浮き出ているわよ」

やや奥目がかつた大きな瞳が輝く。

「安心して、正真正銘の独り身よ」「好きな男の人とか、恋人は勿論居るんでしょ? いやあ、参つたな、こんな立ち入つた事を聞くなんて、僕どうかしてるよ」「いいのよ、はきはきしてる方が。ウジウジしている男は大嫌い。今は居ないわ。男友達は何人か居るけれど」「そうだよな。こんなに明るく、朗らかだもんな。それに、顔も綺麗だし、持てるのは当たり前だ」「それにとは何よ。付け足してみたいに聞こえるわ」「ご免よ、ご免」

ドスンとの大きな振動で身体が前後に揺れた。

「皆様、お疲れ様でした。只今、北京首都空港に到着致しました。飛行機が完全に止まるまではそのままの姿勢でお待ち下さい。これからの皆様の旅が愉しいものでありますよう、お祈りしております。またのご利用を、クルー一同お待ちしております」

「今日はどこらにお泊りですか？」と、健治はドキドキしながら質問を發した。そんな事、貴方に教える義務は無いわなどと言われたらどうしようかと思ひながら。

「会社は名刺に書いてありますように、昆崙飯店（ホテルの意味）の近くの復興大廈（ビルディング）ですけど。ホテルは天安門の方へ下った所に在る永久賓館（ホテル）です」

胸を撫で下ろした健治は北京市街区地図を広げた。「君の会社は隣のビルだよ。内の会社は、ほら、ここの長城大廈です。偶然過ぎるね。永久賓館はここにあるよ」健治は指差しした。

「方角が同じですから、送りますよ」「否、よろしいです。一人で行けますから」「何も、遠慮なさらず、タクシー代は会社の経費で落ちますから」

その時、飛行機が停止し、タラップが横付けされた。健治は立ち上がって、通路に出て天井ケースに入れた黒のボストンバッグを下ろした。満席の

人達はぞろぞろと出口に向かう。

機外の空気を吸い、タラップを降りて、バスに乗った。戸外は夕陽が沈み、夕焼け雲が焔く。心地好い薫風が頬を撫でてゆく。ターミナルに到着し、満員の乗客は胴長バスから吐き出された。日本と違って、国内便でもバスポートを見せる。中国人は身分証明書を。荷物検査も受けて外に出た。

市内行きのバスに人々は続々と乗り込む。タクシー乗り場は運賃が高いせいか、その八割は外人である。健治はトランクに二人分の荷物を入れ、後部座席に京華を誘導しながら乗った。「昆崙飯店」と行き先を、坊主頭の運転手に告げた。片側三車線の直線高速道を西に向かつて、赤いタクシーはひた走る。両脇に規則正しく並んだスウィーツと伸びたポプラの葉が次々と遠ざかる。

一週間前の早朝、逆方向のタクシーの中から旭に映える新緑を仰いだ事を思い出す。

夕暮れの風情も一興である。まして、隣からは温

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。